

天声人語

山の美しさがすぐに目に浮かぶ季語がある。「山装う」は、秋の紅葉におおわられるさまを描く。冬の深い雪に閉ざされれば「山眠る」となり、夏になり緑にあふれれば「山滴る」。20日に77歳で亡くなった登山家の田部井淳子さんのお気に入りは、春の「山笑う」だった▼木々が一斉に芽吹いて山一面が笑っているようで、一番元気が出る季節だと書いている。大学進学で福島から上京し、寮生活になじめず体調を崩したときも、笑顔をくれたのは山だった▼友人に連れられて行つた奥多摩の御岳山をきっかけに山歩くようになる。赤城山、八ヶ岳、谷川岳……。東京生活で眠つてゐる体の細胞が「山に行くと『解放!』となつて、なんだか力が湧いてきて、イキイキしてくるような感覚がありました」へ「私には山がある」▼社会人になって、男性にまじつて毎週のよう山や岩に登つた。1975年、雪崩に巻き込まれて死を覚悟しながらも、女性初のエベレスト登頂に成功した。その後も次々と世界の頂に立つた▼大きな挑戦しながらも、子どもを育て、普通の生活を営むことにこだわつた。登山が一部の人しか行けないような難しいものであつてはいけない、との思いからだろう。競争もなく、特別な才能もいらない「万人向けのスポーツ」だと訴えた▼晩年は、抗がん剤治療を受けながら、東日本大震災で避難した人たちと山を歩いた。自然から元気をもらい、登ることの厳しさと楽しさを分かち合い続けた人生だった。

2016・10・26